

「雛」の心性 — 『雛の誕生』を読んで

森下みさ子
(大学教員)

「雛」の誕生への問い

和らいだ日差しの下、桃の小枝を手にした少女たちが走り寄ってくる。「さあさあ、どうぞ、あがって、あがって」と声を掛ける少女の手中にも桃の枝が握られている。屋内では、幼い女の子や少女や女性たちが何やら楽しそうにおしゃべりの花を咲かせている。奥まった台の上には、三対のお雛様が、小さなお膳を前にすまして座している。なんてほのぼのと幸せそうな光景だろう。『雛の誕生』と題されたこの本を手にした人は、まずは「雛節供」(『江戸繁昌絵巻』)に描き出された、幸福の

縮図のような表紙に迎え入れられる。と同時に、毎年春の兆しとともに飾るわが家のお雛様を思い浮かべる人も、幼い頃口ずさんでいた「雛祭り」の歌を思い出す人もいるだろう。あれ、そういえば、表紙のお雛様は段飾りになっっていない、と不思議に思う人もいるかもしれない。本を開いてみれば、口絵からして、お雛様とは似て非なる人形の写真も載っており、ごく当たり前に祝ってきた「雛」の由来がにわかには謎めいて、ふっと問いが湧き起こる。「お雛様、あなたたちはいったいどこからやって来たの?」

その問いに、極めて真摯に向き合ったのが、

森下みさ子 (もりしたみさこ)
白百合女子大学児童文化学科教授。「児童文化」「おもちゃ論」等担当。
単著に『江戸の微意識』(新曜社)、『江戸の花嫁』(中央公論社)、『娘たちの江戸』(筑摩書房)、『おもちゃ革命』(岩波書店)がある。

この大部な本、皆川美恵子著『雛の誕生―雛節供に込められた対の豊穡』（春風社 二〇一五年）である。クイズの答えのような、手品の

種明かしのような謎解きなら、もつと簡便な本にまとめられもしただろう。けれど、長らく児童文化史や女性史の研究に携わり、毎年各地の雛を見に足を運んできた著者は、当時の史料に忠実にあたり、そこから想像し得る事を地道に重ねることを自らの使命のように選び取って、謎解きに向かった。結果として、絡まっていることさえ意識されてこなかった「雛」の謎玉が、少しずつ解きほぐされていったのである。

ここで指摘しておきたいのは、著者が明らかにしたのは「雛」という物の歴史ではないということだ。物だけの変化ならもつとわかりやすい単線で描くこともできるかもしれない。が、著者が史料から想像を広げて捉えようとするのは、往時の人々が「雛（の前姿）」をどのように扱っていたか、そこに宿る「心」

のさま、すなわち「心性」とも言えるものである。

目からウロコ

さて、雛に宿る心性を解き明かす細やかな手さばきは、残念ながら本書を読み進めることで味わっていたかどうか。日記、随筆、史書、禁令に至るまで、史料に刻まれた「雛」に関する言葉を丁寧によく取って読み解いているからだ。ただしその手さばきは、歴史の専門家にしかわからないような難しいものではなく、「紹介」という形で易しく説かれていることを付け加えておこう。

ここでは、謎が解きほぐされて明らかになった「目からウロコ」の史実の断片のみ伝えるほかない。例えば、人形には人の身代わりとなる「ひとがた」と、愛らしく調べられた「ひひな」の二つの流れがあるが、その両方にかかわって（先述の口絵の）「あまがつ」という人形がいること。「天児」という字を当て

ることもある「あまがつ」は、公家社会において幼児の守護を任された幼児専用の人形ひとがたとして男児にも贈られていたという。一方で、『源氏物語』の若紫が弄ぶように人形の衣裳を調べ動かして遊ぶ「ひひな」があり、着せ替え人形に興じる女兒の遊びの本性に合わせるかのように、女兒の生育祝いとして（まだ結婚の予祝とは言えない形の）雛節供が催されていた。注目に値するのは、子ども用に小ぶりに作られた祝儀の道具を、なんと小さな「御使い人形」が届けていることである。著者がたびたび記すように、身代わりや守護の意味を超えて、人形が醸し出す小さな世界こそ愛しんで遊ぶ「ミニアチュール」の志向がほの見える。このほほ笑ましい祝儀が「雛ひな満みで」と称して十三歳をもって閉じられるところにも、女兒特有の遊びの園が人形と共に囲われ守られていることが感じられる。もちろん現在の私たちの感覚を当てはめて解する危険は避けねばならないが、著者の同性として

の共感が、女兒の生育を守り祝す方法のあれこれを細やかにすくい取り引き寄せる手法につながったことは間違いない。

人形に仮託される小さな世界は、江戸時代に入ると、少女の生育儀礼という囲い地を出て、武家や町人の女性たちが春の訪れとともに祝う、女性たちの祭りへと移っていく。その道筋に大きくかわるのが、高価な婚禮道具を細部にわたって摸した雛道具である。姫君の婚礼をミニアチュール化した雛道具が、結婚をより晴れがましいものにしたのがうかがえる。と同時に「ひとがた」をしのばせる紙細工の立雛の姿は薄れ、高価な衣裳や冠で調えられた内裏雛が主役となって、雛道具と共に飾られるようになる。著者が言うように、江戸時代においては、結婚の「晴れやかな目出度さ」が重んじられ、自分たちにはあり得ない高貴な結婚を模した内裏雛が「その虚構性ゆえに、女性たちが血筋に関係なく越えてゆく結婚のための呪具」となったのだろう。

さらなる謎解きへ

女性たちの思いを託された内裏雛が据えられて雛文化が誕生するところまでたどれば、この本の目的は果たされたと言える。が、実は複雑であるが故によりいつそうスリリングなのは、雛の誕生とともに退いていく「あまがつ」と、よく混同される「ほうこ（這子）」との関係を読み解いた箇所である。

口絵にもあるように竹の胴体を持つ「ハンガー式」の「あまがつ」は、高貴な赤ん坊の災厄を引き受ける身代わりとして用いられ、やがて悪霊から姫君を守護する代行人形（嫁の偽装をさせた身代わり）の重責を果たすようになる。これとよく混同されるのが「ぬいぐるみ式」の「ほうこ」であり、これもやはり新生児の傍らに置かれるが、嫁入りに同伴した後は雛段にも飾られ、やがてこれに衣裳が着せられて愛玩人形へと移行していく。背景には、有職故実を説く伊勢流と、小笠原流

の流れをひく水嶋流との、生育・婚礼儀礼に関する解釈の違いもせめぎ合っているようだ。

いずれにしても、作法指南書の文言にまで目を届かせることにより「あまがつ」と「ほうこ」の使い分けの実相が浮かび上がってくる経緯は、謎解きの醍醐味を遺憾なく発揮している。とはいえ、これらの人形の謎が解き明かされたわけではない。おそらく、「人形」が「ひとがた」から「にんぎょう」へと移行していく道筋ともかわって、謎はまだまだ解かれるのを待っているに違いない。本書は、さらなる謎解きの旅へと誘う声に満ちているのだ。

「雛」という愛らしくほほ笑ましい対の人形に託された思いをすくい取る柔らかい感性と、史料の難解な言葉から史実を読み取る深い視力は、本来は相いれることが難しい。それが、「雛」を愛しみ「歴史」を愛する著者のひたむきな努力によって結実したのが、この一冊であると言えるだろう。